

# そう怖くはありませんよ

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやま たくろう

井上ひさしの「握手」。私は、この作品で造型されている「ルロイ修道士」の人物像が好きだ。特に、最後の別れの会話はなかなかのものだ。

上野駅の中央改札口の前で、思い切ってきた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。(略)」

「死ぬのは怖くありませんか」に対する返答が、「そう怖くはありませんよ」。

「怖くはない」という全否定ではない。信仰に生きていくはずの修道士だが、「人」としてあくまでも正直だ。「本当に天国がありますか」への答えも「あると信じるほうが楽しいでしょうが」である。「一人の人」としての率直な視点と言えるだろう(ちなみに聞き方も、一般論的な話としての「天国は」ではなく「天国が」となっている。「死んでからその人が行く所として、天国があるかどうか」を話題にしているというニュアンスがある)。

そういえば、別のところでも、「一人一人の人間がいる、それだけのことでですから。」という言葉がある。強烈に「人」の「一人一人」を取り上げるのだ。さらに、「ルロイのこの言葉を忘れないでください。」というのが、信教に関連する言葉ではなく、「困難は分割せよ」というふうの「生き方」に関わるものである(私はこの作品で

この言葉を知った。生きる力につながるいい言葉だ)。

レストランの会話では、戦中の話、オムレットの話のあと、「それよりも」で切り出されるのが、「わたしはあなたをぶつたりはしませんでしたか」という内容だ。「それよりも」は、前の話題をすつとばして大切なことをきり出す転換である。「ひどい仕打ちをしていたなら、謝りたい」という強い思いがそこにはある。「人」を本当に大切にしてきた「ルロイ修道士」の造型が、言葉の端々に見事に息づいている。

この作品では、指言葉、握手、表情や仕草などのボディランゲージも大切だが、会話そのものの含蓄も実にいい。生命が輝く季節、葉桜が終わるころ、修道士は「なくなった」。今年は、この登場人物の言葉をかみしめつつ、葉桜の下を少し歩いてみようと思ってる。